



Title	コミュニティ×デジタルによる「医療が届く仕組みづくり」への挑戦
Author(s)	任, 喜史
Citation	目で見えるWHO. 2023, 84, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コミュニティ×デジタルによる 「医療が届く仕組みづくり」への挑戦



特例認定NPO法人「ASHA」代表理事

任 喜史

公衆衛生大学院在学中に同級生のネパール人医師・サッキヤとともにASHAを設立、代表理事に就任。医療分野の戦略コンサルタントとして働く傍ら、ASHAの事業を統括。

ASHA とは

ASHA は、Basic health rights for all (どこに生まれても安心して健康に暮らす権利を、みんなに) を目指し、ネパールの僻地で医療へのアクセスの改善を目指す NPO 法人です。医療サービス自体ではなく、必要な医療が必要な人々に届く仕組みを、現地の人々自身で維持できるような形での構築に取り組んでいます(それを Affordable and Sustainable Healthcare Access と呼び、その略とネパール語の「希望」をかけて、ASHA と名付けています)。ASHA の活動の特徴は、地域の医療課題をコミュニティの人々の力をデジタルの力を最大限に活用することで解決しようとしていることです。

ネパール僻地の医療改善を目指して

現在の主な活動拠点であるネパールの僻地では、地理的・リソース的な原因による質の高い医療へのアクセスの限界や医療情報管理不足による診療行為の分断

などの医療提供側の課題、自分で必要なケアや受診の判断をする知識がない住民側の課題、さらにそれらの地域の医療問題を解決するキャパシティーがない行政側の課題が重なり合い、人々の医療へのアクセスが阻害されています。これらのネパール僻地の課題に対し、主に2つの取り組みを進めています。

1つは、デジタルを活用することで、コミュニティの人々や既存の医療機関の力を最大化する医療システムの構築で、①地域保健スタッフ×支援アプリによる家庭訪問によるケア制度の創設、②簡易版電子カルテ導入による僻地医療の質向上とデータ管理、③それらのデータを統合・可視化した公衆衛生アプローチの3つを一体的に進めています。

①家庭訪問によるケア制度：医療機関が少なく、道路も未整備という、医療への物理的アクセスの乏しさを解消するため、各コミュニティからコミュニティヘルスワーカーと呼ばれる保健委員を雇用し、患者や妊婦の家庭を訪問して簡単な指導や教育などを行っています

(Primary Health Care)。さらに、医療知識や経験不足を補填し、活動を支援する「ASHA Connect」というアプリを開発・提供し、日々の問診やリスク検知、住民教育をサポートしています。これにより、医療へのアクセスが乏しい環境においても、地域の中に頼れる仕組みを作っています。

②簡易版電子カルテ導入：従来ネパールでは、紙カルテを使っており、それを患者が持ち帰る文化があり、患者がカルテを紛失したり、再診時に持参しないことが多く、都度ゼロから診療せざるを得ない、医療職間の連携が取れないという問題がありました。そこで、医療機関での患者の情報管理を補助する「Nepal EHR」というオープンソースの情報管理ソフトウェアを地方の小規模医療機関用にカスタマイズして導入しています。これにより、医療機関が各患者の過去の診断や治療を把握できるようになり、継続的な医療の提供を可能にしています。

③データの統合・可視化：さらに、ASHA Connect で入力される地域の人



応急処置の健康教育の実習風景



簡易版電子カルテを使った診察風景



① 地域保健スタッフによる家庭訪問活動
② 渡航時の現地メンバーとの集合写真
③ 健康教育の授業風景



々の健康状態と Nepal EHR の電子カルテデータを統合し、可視化できる仕組みを開発しています。人々の医療情報が一元化されることにより、より持続的で効率的な医療が行えるほか、地域の医療状況が把握しやすくなるため、行政が医療改善のための施策を計画することができるようになります。

もう1つの活動は住民側のヘルスリテラシー強化です。前述の活動をする中で、医療にアクセスできる環境下でも、「病気は悪魔の仕業である」などの古くからの迷信を信じ、身体の変化を感じても医療機関の受診をしない人がいるということが挙げられます。そこで、正しい対処や必要なタイミングでの医療機関受診ができるようにするため、主にまだ柔

軟な考えを持つ中学生を対象に家庭医学と応急処置の研修を行っています。これらの活動を通して、人々がいつでも医療を頼ることのできる社会を現地の人たちの力で作り、支えられ続けられるような仕組みづくりを支援しています。

ASHA を支える人々

ASHA は、日本側のメンバーとネパール側のメンバー、合わせて約50名で活動しています。現地の人々が自分達で持続的に支えることのできる医療の仕組みを作るため、ネパールの医療を変えたいという強い想いを持つ現地側のフルタイムメンバーを、日本の約40名のプロボノメンバーがサポートをするという少し変わった体制を取っています。敢えてプ

ロボメンバーを主体とし、多様な経験や知識を持つ方に参画いただくことで、互いの専門性を掛け合わせて新たな価値を生み出すことを目指しています。

今後の展望

電気もままならない僻地でのデジタル活用やコロナ禍など多くの困難があった中で、ようやく作りたい「仕組み」の形が見えてきました。まずは直近1～2年でモデルケースを完成させ、現地側への運営移管や人材育成に取り組んで、現地で継続できる体制を整えることを目標としています。

さらに、2023年度からは、他地域への展開を進める予定です。医療アクセスが乏しく、それがゆえに軽い怪我や病気が重症化したり亡くなってしまうことを課題とする地域は多くあり、これまでの学びを体系化し、より多くの人に「どこに住んでいても健康に安心して暮らせる権利」を届けたいと思っています。

ASHA は、誰もが医療を頼ることができる社会を目指し、活動を拡大していく予定ですので、ご興味をお持ちいただいた方は、是非何かの形でご支援・ご協力いただけますと幸いです。



団体内対面イベントの集合写真